２０２１年度

愛知の美術教育

（第 49 集）

も　く　じ

Ⅰ　第７１次教育研究愛知県集会について

1　全体の感想

2　討論の内容

（1）子どもの思いや考えを豊かにする題材の工夫

（2）コミュニケーション活動を通して発想や表現を広げる実践

（3）総括討論

3　今後の課題

Ⅱ　授業実践

授業実践①　形や色と主体的に関わる力を培う造形活動
―　知識及び技能の習得を大切にして　―
（名古屋・大島　聖矢）

授業実践②　主体的に自分の思いを広げ、試行錯誤し続ける児童の育成
～小５「あったらいいな　こんなことができるお面～未来のお面～」の実践を通して～
（豊川・冨安　愛乃）

愛知教職員組合連合会　教育課程研究委員会美術部会

２０２１年度　教育課程研究委員

ブロック推薦　　◎部長　○副部長

名古屋			尾張			三河		
氏名	単組	学校名	氏名	単組	学校名	氏名	単組	学校名
○秋田　英彦	名古屋	菊住小	石原　正悟	尾北	門弟山小	近藤　亘	豊橋	南部中
森岡　隆大	名古屋	白山中	小林　佳奈子	小牧	応時中	三浦　英生	刈谷	依佐美中

第 67 次～第 70 次教育研究全国集会リポート提出者

67 次			68 次			69 次			70 次		
氏名	単組	学校名	氏名	単組	学校名	氏名	単組	学校名	氏名	単組	学校名
――	――	――	◎榊原　慧太	豊川	一宮中	○森田　弥生	西春	新川中	――	――	――

第７１次　教育研究全国集会　リポート提出者　大島　聖矢　（名古屋・明正小学校）

Ⅰ　第７１次教育研究愛知県集会について

１　全体の感想

「美術教育を通して子どもたちに伝えたいこと～子どもたちのゆたかな学びのために～」をテーマに実践報告や討論がすすめられた。総括討論では、図工・美術教育から何を学ばせるのかという議論を通して、本年度のテーマについて考え、深めることができた。タブレットやＰＣを用いて観賞会を行ったり、描画アプリでデザインを考えたりと、ＩＣＴ機器を活用した実践が多く報告された。また、図工や美術の授業に対して子どもが抱える不安や悩み、思いを受け止め、教員がどのように支援していくとよいのかという議論を通して、私たち美術教員が常日頃考えなければならない課題を確認することができた。

２　討論の内容

(1) 子どもの思いや考えを豊かにする題材の工夫

自らの思いをもって主体的に取り組ませるために、タブレット端末の描画アプリを用いてオリジナルのアイコンをデザインする実践など､ICT 機器を活用する実践がいくつか報告された。また、ペーパーフラワーのデザインや制作を行った後、現在猛威を振るっている新型コロナウイルス感染症で注目をされているエッセンシャルワーカーへのプレゼントを通して、社会に貢献することへの意義を実感できる実践などが報告された。討論では､「子どもの思いや考えを豊かにする題材の工夫」というテーマに沿った討論が行われた。市販の制作キットでも、他者とのかかわりや豊富な材料の中で制作に取り組むことで、それぞれの個性を発揮した作品を作り出せるようになることが確認された。また、ＩＣＴ機器を制作や鑑賞の場で活用する際、どのような手だてを用意して指導をしていくとよいのか。また、情報モラルの大切さなどもあわせて指導するときの留意点について話し合われた。

(2) コミュニケーション活動を通して発想や表現を広げる実践

廊下の天井や窓ガラスなど、学校全体を美術館に見立てて校内のさまざまな場所に全学年の作品を展示し、鑑賞を通して作品への思いやお互いのよさを認め合い伝え合う実践が報告された。そこでは、他の教科や学校行事との連携や、他学年とのかかわりを通して互いのよさを認め合い、すすんで思いを話し合う姿が報告された。また、絵本の読み聞かせを導入に、ウェビングの活用や、ペアやグループなどでの交流を通して豊かな発想で世界に一つだけの帽子をつくる実践などが報告された。討論では、相互鑑賞や交流タイムを行い、友だちとかかわることで、一人では思いつかなかった発想や表現と出会い、互いに感化しあって表現の幅が広がることが確認された。また、立体作品をつくる際、平面でのアイデアスケッチから立体にするときの手だてについて話し合われた。

(3) 総括討論

助言者の先生方からは、手を使う技術や技能は大切であると同時に、ＩＣＴ機器の活用も今後は必要になってくること、それぞれの題材を通して何を学ばせたいのか、何を大切にしたいのかなど、教員の視点をぶれずにもつことを指導していただいた。また、条件を絞ったりスモールステップで取り組ませたりすることで狙った力を身につけさせられることがわかった。更に、美術という教科が楽しい教科であるために、魅力的な題材のキャッチコピーや強度や安全性、展示方法などにも工夫を凝らし、思い出になる作品づくりが大切であることについて助言を得た。

３　今後の課題

ＩＣＴ機器を用いた実践が複数報告されたが、ＩＣＴ機器やネットを活用した情報収集や活用方法の工夫が必要であることが確認された。また、限られた授業時間数の中での基本的な造形技能の定着と、発想や表現を広げる工夫が必要であることが課題として挙げられた。

Ⅱ　教育課程編成にあたっての基本的な考え

○「基礎・基本」について

　創造することの楽しさを感じるとともに、自由に発想し、表現するなどの造形的な創造活動の基礎的能力を身につけることが、図工・美術の基礎・基本であると考える。

○「生きてはたらく力」について

　図工・美術における「生きてはたらく力」は、美しいものを敏感に感じ取り、自然を愛し、人への温かい気持ちにつなげることのできる力である。また、作品を通して人とかかわり合い、認め合い、高め合うことができる力も重点としてあげられる。

Ⅲ　授業実践

授業実践①

形や色と主体的に関わる力を培う造形活動

―　知識及び技能の習得を大切にして　―

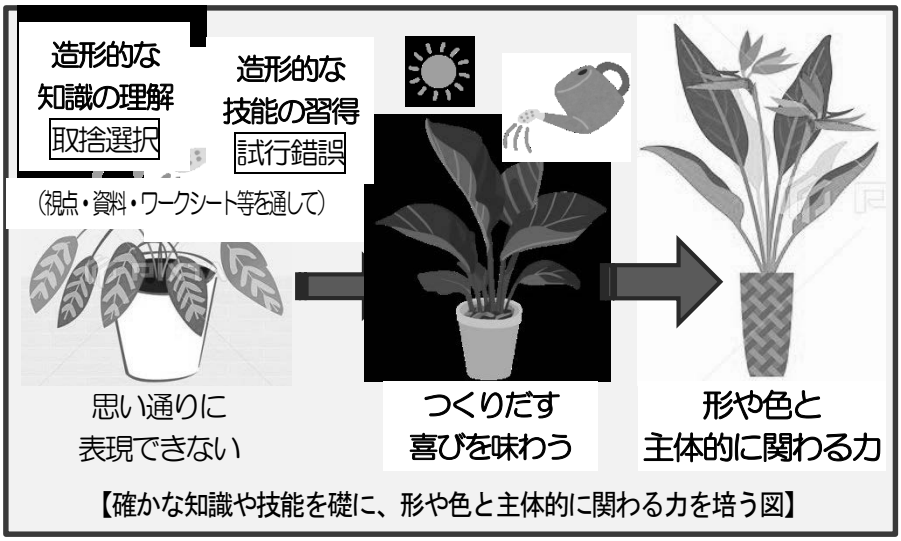
名古屋市立明正小学校　大島聖矢

研究要項

１　研究のねらい

Society5.0 の時代と言われ、人間の仕事の多くが AI に奪われると言われている。これからの時代を、より人間らしく、より自分らしく生き抜くために、育むべき力は何か。私は、人生がより楽しく、豊かなものになるように、図画工作科の学習を通して、形や色と主体的にかかわり続ける力を育成したいと考える。

目の前の子どもたちには、造形的な知識をもとに、発想を広げられない姿や、思い通り表現できずに悔しがる姿が見られた。造形的な知識や技能を確かに身につけ、それらを豊かに発揮することができれば、思いを膨らませ、のびのびと表現できるのではないかと考えた。



【確かな知識や技能を礎に、形や色と主体的に関わる力を培う図】

そこで、造形的な視点や表現方法など、発想や表現の幅を広げる手掛かりとなるものを、子どもたちにさまざま示していく。それらの手掛かりから、取捨選択したり試行錯誤したりして、創意工夫し、表現をすることができるようにする。造形活動が「楽しい」「好きだ」「少し得意かも？」という喜びや実感を、十分に味わうことで、今後の人生において、形や色と主体的にかかわり続けるための素地を培うことができると考える。以上から、主題に迫るための手だてを次の二つとした。

①　造形的な知識や技能の確かな習得を目指した、視点や資料の提示 ②　発想・構想から表現、鑑賞までの題材の歩みを視覚化し、自己調整力の育成や個別支援の充実、達成感の拡大をはかるワークシートの活用

２　研究の内容

(1) 研究の対象　名古屋市立穂波小学校　第６学年

(2) 授業実践１「わたしの大切な風景」

①　題材について

身の回りに広がる日常の風景や、心を奪われたあの場所の風景…その風景に対す

る自分の思いが伝わるように、工夫しながら絵に表し、互いの作品から、大切にしたい思いやよさを感じ取る題材である。

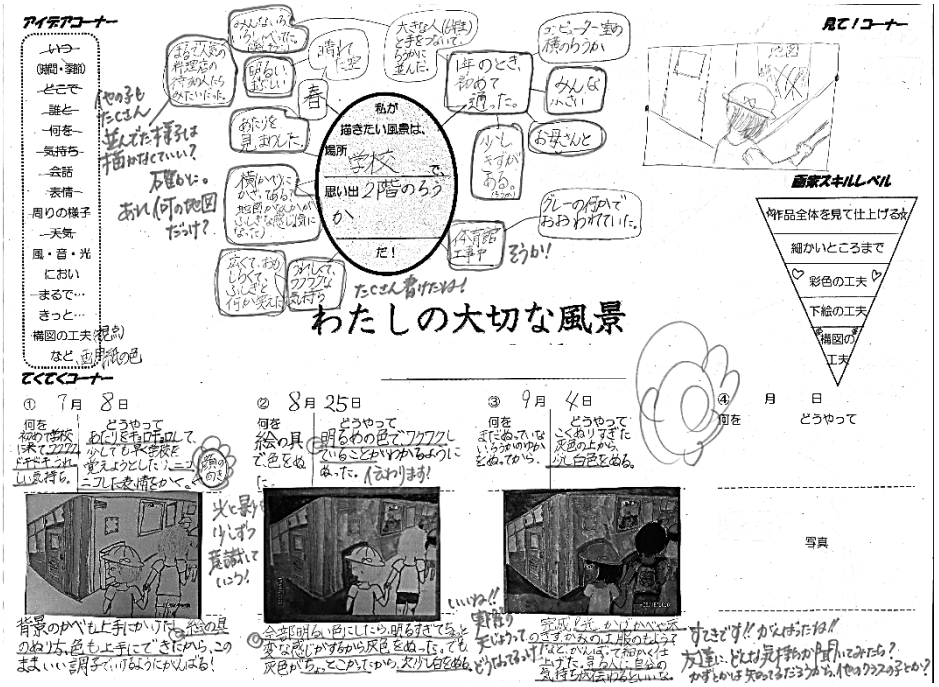
まず、発想や表現の幅を広げる視点をさまざま示し、それらをヒントとして取捨選択し、想像を膨らませさせたいと考えた。そして、自分の思いを表現することができるようにするために、描く段階ごとに、手順やコツなどを示す資料を提示した。

② 活動の様子

活動ア　大切に思う風景を見付け、表したい思いを明確にする。

教科書の参考作品から、思いを効果的に表すために、描く「目線」に意識するとよいことに気付くことができた。校内の風景を描きたいと考えた子どもも多かったが、「自宅のベランダから見た夕陽」「家族で旅行した時の景色」など、校外の風景を大切に思う子どももいた。よって、校内に限定せず、校外の風景を描く場合は、参考にできる資料を持参させた。画用紙を切ってつくった手作りのスケールで風景を切り取り、目線の高さを工夫して、構図を考えていた。

ワークシートの「アイデアコーナー」で、発想・構想のヒントとなる視点を示したことで、取捨選択しながら思いを膨らませていた。



【ワークシート】

活動イ　大切な風景に対する自分の思いが表れるように、工夫して下絵を描く。

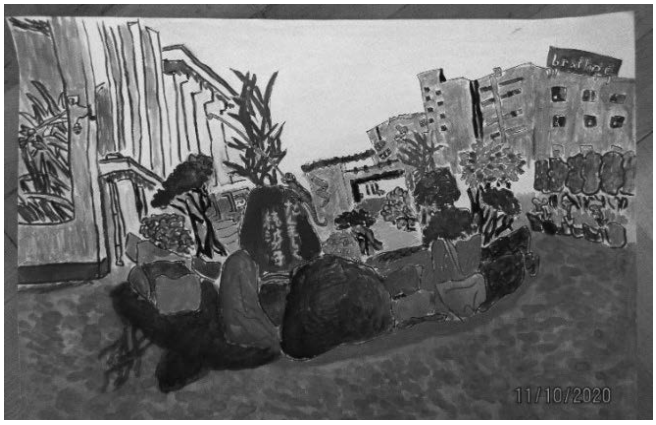
下絵を描き始める段階では、順を追って描き方を示した４枚の資料を提示した。下絵段階でのコツ（気持ち、見る視点、配置、大きさ、向き、重なり、奥行き、バランスなど）をカードで示した。また、ワークシートの裏面で透視図法を紹介し、遠近感を表す方法を伝えた。「立体的

【下絵を描くコツを示した資料や視点と、それを友達と見る子どもの様子】

に見える」と高揚していたが、描かせてみると難しく、発達段階に合わせた指導の必要性を痛感した。思いを効果的に表すために、実際の形や色を変えてもよいことや、コンピュータ室や図書室で資料を探してもよいことを伝えた。下絵の線を油性ペンでなぞるか、クレヨンや筆ペンでなぞるか、もしくはなぞらずに彩色するか、参考にできる資料を提示すると、「温かい感じがするからクレヨンにしよう」「筆ペンの雰囲気が気に入ったから試してみよう」と、取捨選択していた。

活動ウ　大切な風景に対する自分の思いが表れるように、工夫して彩色する。

画面手前の目立たせたいものか、画面奥の空からか、どちらから彩色していくとよいか、資料をもとに話し合った。色の「重なり」や「濃さ」の視点から、画面の奥のものや淡いものから彩色していくとよいと考えるようになった。



【完成作品「がんばり山」】

思いを効果的に表すために、点描やドライブラシなどの表現技法や、バチック、ドリッピング、コラージュなどのモダンテクニックを提示し、試行錯誤を促した。また、彩色段階でのコツ（気持ち、色、重なり、奥行き、光、影、雰囲気、バランスなど）を示した。木の葉、芝生、桜の花びらを点描で表す姿や、「中庭の池をマーブリングで表そうかな？」と話し、友達と一緒に試す姿が見られた。

ワークシートの「てくてくコーナー」に、「今日、『何を（どんな思いを）』『どのように（どんな視点をもとに）』工夫して表していくか」を記述させ、表現の歩みを視覚化するとともに、個別に技能支援をした。構図、下絵、彩色の各段階で工夫が見られ、個性が表れていた。

活動エ　校内に展示して鑑賞する。

「手前の地面や岩にいろんな色を重ねていてきれいで、奥行きを感じる」、「建物や地面に影があるから立体的」など、造形的な視点をもとに鑑賞することができた。鑑賞の前にもポイントとして示したが、製作の各段階で意識させてきたことで、造形的な視点を「知識」として習得しつつあることが感じられた。

③　分析・考察

○　下絵の描き方を資料提示したことにより、画面全体を見ながら薄い線で構図を考えることができた。

●　提示した資料の細かさや、示した視点の多さが、子どもたちを混乱させたり、「本物みたいに描きたい」という思いを強めたりしてしまい、表現が慎重になってしまった。視点を精選し、のびのびと思い切り、楽しんで表現させたい。

△　ワークシートの活用によって、個々の思いや活動の様子を把握し、個別に支援することができた。しかし、ワークシートを介した対話は深められなかった。

(3) 授業実践２「穂波小の校庭から出土した、『ほにわ』」

①　題材について

前任校は昨年度、創立 70 周年を迎えた。運動場の改修工事も行った。「穂波小の運動場から、何やらたくさん出土したよ！ 埴輪？ いや、これは穂波小の校庭から出土した新種の『ほにわ』だ！ 『ほにわ』って何だ？ どんな形だ？ どんな思いや

願いが込められているんだ？」と、紙芝居形式で投げ掛けた。思いや願いを込めた自分だけの「ほにわ」を製作し、運動場で焼成した。

発想・構想のヒントをさまざま提示するとともに、表現方法を資料提示し、個別支援していく。卒業まで半年と迫る中、自らの手でつくって焼成し、校内に展示して多くの人に見てもらうことで、思い出深い経験になる題材である。

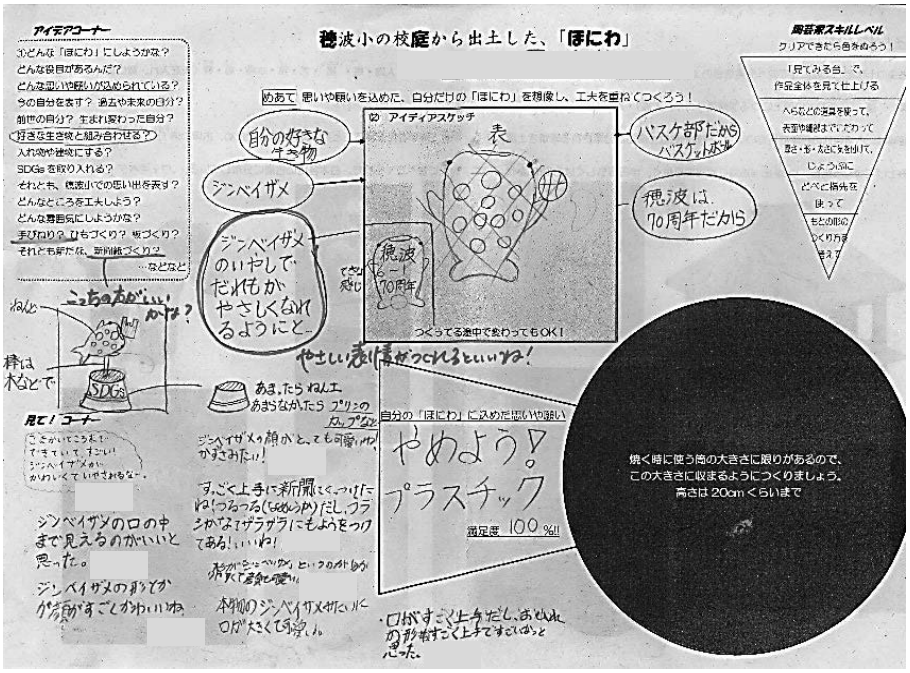
【完成作品（焼成前）】

② 活動の様子

活動ア　表したい「ほにわ」の形や、込めたい思いや願いを明確にする。

紙芝居調のスライドで題材と出会い、教員が発掘した「ほにわ」を実際に見せることで、表現への意味や価値を見出すことができるようにした。「楽しそう！」「どんな『ほにわ』にしようかな？」と、ワクワク感を抱いていた。

ワークシートの「アイデアコーナー」で、発想・構想のヒントとなる視点を示し、また裏面に、埴輪の役割や写真を紹介して、取捨選択を促した。表したい思いや願いを明確にし、アイデアスケッチを描いていた。



【ワークシート】

活動イ　イメージを工夫して表す。

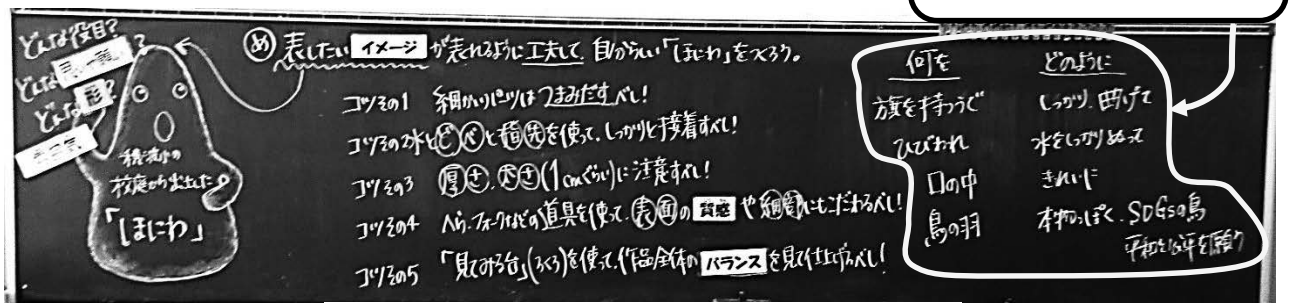
４種類の成形技法（ひもづくり、板　づくり、手びねり、丸めた新聞紙を芯材にする）の見本を提示し、特徴を伝えた。また、個々が構想した形と成形技法をワークシートで把握した。子どもたちは、つくりたい「ほにわ」の形に合った成形技法を選び、創意工夫しながら、夢中になって表現することができていた。

【道具を使って一生懸命表す子どもの様子】

意識させたいコツを精選し、作品の「厚さ」や「太さ」、表面の「質感」、ろくろを

使って見る「角度」を変えながら、作品全体の「雰囲気」や「バランス」に意識することを重点的に伝えた。最後、「何を」「どのように」工夫して、自分らしい「ほにわ」を完成させたいかと教員が尋ねると、「応援団の旗を持つ腕を、しっかりと曲げてつくりたい」や「鳥の羽に平和の願いを込めて、本物みたいに細かくつくりたい」という思いや願いを聞くことができ、子どもたちの発想の豊かな広がりを感じた。それらの思いを満足に表現できるよう、個別支援に尽力した。

「何を」「どのように」工夫して完成させたいか発表した、子どもたちの思いや願い



【製作の仕上げ段階での板書】

活動ウ　校内に展示して鑑賞する。

運動場で焼成した後、発想・構想で使ったワークシートの上に作品を置き、鑑賞を行った。題材を通して一枚のワークシートを活用することで、作品と、込められた思い、アイデアスケッチとを並べて鑑賞することができ、作者のこだわりや、思いの変容が鑑賞者によく伝わった。題材を通した自身の歩みを振り返るとで、達成感や喜びを味わうことができたと考える。

【作品を校庭に埋めて鑑賞する様子】

【ワークシートを使って鑑賞する様子】

③　分析・考察

○　発想・構想のヒントとなる視点は最大限に示し、表現のコツは最小限に精選したことで、子どもたちは思いを大切に、のびのびと表現することができた。

○　成形技法の資料提示と個別支援により、表現方法に迷う姿は見られなかった。

●　ヒントをもとに十分に発想を膨らませた後、どんな思いをどのように表すか、「質感」や「動き」、「雰囲気」などの視点と、発想・構想とをより結び付けることができるように、ワークシートの構成を工夫したい。

【完成作品（焼成後）】

3　研究のまとめ

豊かな発想・構想につながるヒントを視点として与え、表現するときのコツやポイ

ントを示すことで、「できた！」「楽しい！」という達成感や喜びを味わわせることができた。発想・構想を広げるための視点は最大限に示し、手順やコツなどを示す資料や視点の提示は必要最小限に精選することで、子どもたちは、自身の思いを大切に取捨選択し、試行錯誤しながらのびのびと表現することができるということが分かった。

また、発想・構想から表現、鑑賞までの題材の歩みを視覚化するワークシートの活用によって、個々の思いや活動の様子を把握し、個別支援を充実することができた。終末鑑賞で、作品とワークシートを介して友達と対話することができただけでなく、「『何を』、『どのように』工夫すると思いが現れるのか」と、今日のめあてをじっくりと考え、活動後に振り返る自己内対話を重ねる中で、記述内容や考えが徐々に具体的になり、学びを自己調整する力の育成につながったと言える。

図工を「好きだ」と感じ、主体的に形や色と関わる姿が増え、教室は、描いた人気アニメの絵や折り紙、輪飾りなど、さまざまな形や色に囲まれていた。

あふれ返る物や情報に振り回されず、自己や他者にとって本当に意味や価値のある形や色と、主体的にかかわり続ける力を培うことができるよう今後も研究を続けるとともに、教員自らも形や色を通して、より豊かで楽しい生活を創造していきたい。

【子どもたちが自作した絵やカード】

授業実践②

主体的に自分の思いを広げ、試行錯誤し続ける児童の育成

～小５「あったらいいな　こんなことができるお面～未来のお面～」の実践を通して～

豊川市立小坂井東小学校　冨安愛乃

１　題材のとらえ方とねらい

本校の５年生は、図工の授業を楽しいと感じている児童が多い。次は何を製作するのか、どんな素材に出会えるのか楽しみに、意欲的に取り組むことができる。１学期の製作では、アイデアスケッチに近い形ができた段階で自分はここまででよいと決めてしまい、前回の製作よりももっと進化させようと工夫する姿はあまり見られなかった。つくりながらどんどん発想を変化させ続けることをよしとしない児童が多いと感じた。そこで、教員が新しい発想を見つけたらダブレットで撮影し、テレビに映し出すことで、友だちの作品を参考にしたい児童は、作品をよりよくしていくと考えた。本題材は、便利な機能や未来的なデザインを取り入れた、楽しく、おもしろく、かっこいいお面を製作する。例えば、ウイルスを撃退するお面や３Ｄバーチャルツアーをするためのお面など、自分で主題を決めてふさわしい形や色を考え、身に着ける場面を想像しながらつくっていく。どんなふうに身に着け、どのように機能を使うのかを伝え合うことで、おもしろさを味わわせることができる題材である。

２　指導の実際

（１）素材を集める

素材は、プラスチック、段ボール、カラーセロファン、ゼリーのカップ、ガチャガチャのカプセル、緩衝材など手に入りやすく、身近なものにした。授業に入る前から余裕をもって、透明感のある使えそうなものを集めさせておき、お気に入りのものは自分の手元に、そうでないものや教員が集めた素材は集積場所に置き、誰でも自由に使えるようにした。

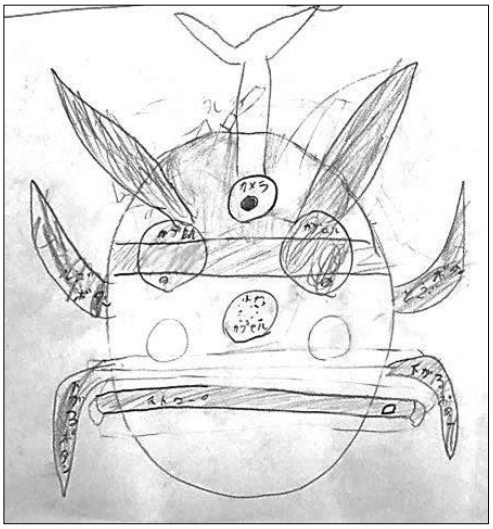
資料①＜集積場所から素材を探す児童＞

（２）思いをもつ

題材の導入で、世界のさまざまなお面や現代の高機能的なお面を紹介し、児童がお面の機能や表情などを想像できるようにした。そして、「これまでに見たことのない、便利な機能や未来的なデザインを取り入れたお面をつくろう」と呼びかけ、意欲づけをした。

（３）試行錯誤する

お面として機能するように、身に着けたときの感じや使い勝手を試しながら改良を加えていった。試行錯誤しながら製作をすることが苦手な児童には、アイデアをふくらませることが大切だと伝え、自分



資料②＜児童のアイデアスケッチ＞

があるといいなと思うものを聞き出し、組み合わせることができるようにした。

アイデアスケッチに近い形ができた状態で製作をやめてしまった児童が何人かいた。その際、アイデアスケッチからどんどん変わったほうがよいこと、変わらなければ成長していないことを伝えると製作を再開した。さらに、製作途中で、人のやっていないことをした児童や試行錯誤中の児童を褒めることで、もっと発見、発明をしたいという意識を高めることができた。

資料③＜身に着けながら製作する児童＞

一方、試行錯誤できないから友だちを参考にしたいという思いをもつ児童もいることに気づいた。製作時間をできるだけ確保するために、新しい発想が出たときはダブレットで撮影し、テレビに映し出すことにした。

（４）未来のお面ショーを開く

未来のお面ショーでは、どんなふうに身に着け、使うのかを披露した。製作の途中に机間指導しながらお面の機能を聞くことでお面ショーでのプレゼンにつながるようにした。そのようにしたことで、多くの児童がお面のデザインを考えた動機や機能、つくりながら思いついたことなどをプレゼンすることができた。そして、友だちからよいところを伝えてもらうことで、自分の作品に自信をもつことができた。

資料④＜完成した作品を身に着ける児童＞

資料⑤＜未来のお面ショーをする児童＞

３　成果と課題

（１）成果

製作中は、タブレットを活用して友達の作品を参考にしたり、教員も参加して試行錯誤したりすることで発想を広げていった。その中で、「誰もやってないことをやろう」「本当に存在していないか調べてみよう」という向上心も見られた。鑑賞の時間は、ただ見合うだけではなく、ショーを開くという形にすることで交流しながら楽しく鑑賞をすることができた。見た目だけではわからない、「動物の言葉に変換される」「ボタンを押すとビームが出る」などの作品に対する思いを友達に伝える場となった。

（２）課題

今回、アイデアスケッチの段階で、さまざまな機能を考えたり、丁寧にデザインや色を描いたりしたため、アイデアスケッチを意識しすぎてしまい、製作が滞る場面があった。今後は、アイデアスケッチは簡単にして、手を動かしながら発想ができるようにしたい。また、ホットボンドでの接着にストレスを感じている児童もいた。５年生の段階では、テープ類の接着も可能にすれば、製作の幅が広がると考えた。今後は児童の発達段階に合った接着方法を提案したい。